

氏名(本籍地)	清水 みち (神奈川県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第72号		
学位授与年月日	平成25年3月16日		
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第2項該当		
論文題目	意匠と小説：Virginia Woolf の手法の発展 － <i>To the Lighthouse</i> を中心に		
論文審査委員	(主査)	昭和女子大学教授	平井 法
	(副査)	昭和女子大学特任教授	島田 太郎
		昭和女子大学特任教授	渡邊 利雄
		中央大学名誉教授	深澤 俊

論文要旨

本論文で取り上げた Virginia Woolf (1882-1941) は、おもな創作活動の時期が第一次世界大戦と第二次世界大戦に挟まれており、この時期は芸術手法の上で大きな転換期にあった。しかも Woolf は一族に知的な学者、前衛的な芸術家をもち、彼女たちを囲む Bloomsbury Group の活動は、イギリスの思想・芸術活動の一つの中心であった。この中で Woolf が作品ごとに手法を変え、発展させながら小説を創りあげていった経緯をたどることによって、モダニストとしての Woolf の本質を究明しようというのが本論文の主旨である。本論文では、その中でも重要な作品である『灯台へ』 *To the Lighthouse* (1927) に焦点を当てて、論を進めている。「編む」とか「切り抜く」といった日常的な行為が象徴化されて、作品全体を有機的につなぐモチーフとなっており、これは Woolf の他の作品にも関わる流れとなっている。この分析によって、Woolf のモダニズム手法の重要な一端を解明しようとする。

第1章では、Mrs Ramsay が行う編みものを中心に、この行為が処女作 *The Voyage Out* から最終作 *Between the Acts* に至るまで、濃淡はあるものの作品構成上重要な行為となって描かれていることを指摘する。これは家庭の中で女性が、とりわけ妻、あるいは母として人をつなぐ意味を持つこととなり、これが物語の上でも、作品構成の上でも重要な要素となる。やがてこの行為は、家族や社会の中で女性たちが置かれた地位を示す指標となり、最後に女性の創作行為と家族の中での役割への問題意識へと、テーマが発展することを論じている。

第2章では、Ramsay 家の子どもである6歳の James が、商品カタログを切り抜きながら、楽しみにしている翌日の「灯台行き」にたいして、父母の示す態度や言葉への子どもの反応を、作者が作品としてどのように展開させていったかを論じている。James の「切

り抜き」の巧拙の原因である子どもの感情の揺れの表現は、Woolf が刊行に関わった精神分析学者 Melanie Klein の学説と並行するかたちで描かれていると説明できる。「切り抜き」を浮き立たせる手法は、初期の短編“The Mark on the Wall” (1917) や“Kew Gardens” (1919) から後期の“The Searchlight” (死後出版 1944)まで、絶えず試行発展されてきたものと言える。

この第 1 章の「編む」行為によって生み出された人間の絆も、第一次大戦の時期に Mrs Ramsay の死が重なり、10 年後の一家は崩壊の危機にまで達してしまう。それを再生へ導くものは追憶による復活であり、日曜画家 Lily Briscoe が 10 年前に未完成のまま放置していた絵の完成によって、復活への足がかりがなされる。この Lily による絵の再構成は Mrs Ramsay の「編む」行為と補完関係にあり、作者 Woolf にとって登場人物の内面を追究することによって新しい小説を模索する方法でもあった。本論の第 3 章では、この Lily の「再構成」を、Woolf の友人で美術評論家の Roger Fry によってイギリスに紹介されたフランスのポスト印象派の絵画思想を包含することによって、解明を試みる。

20 世紀初めの社会の変動期にあって、伝統的価値は崩壊しかけており、今では古びてしまった Mrs Ramsay の紡いだ混沌とした豊穡な物語から、前衛的な画家 Lily Briscoe は、そして作者である Virginia Woolf は、どのような新しい作品を創造したのか。本論文は、このモダニストとしての Virginia Woolf の検証である。